街角には郷愁が漂う

シリーズ・街並み拝見6

真美ヶ丘・かつらぎの道を歩く

◆真美ヶ丘の由来は牧場の馬か

真美ヶ丘は、香芝市の東部に広がり広陵町に接するニュータウン。中和幹線が東西に、また真美ヶ丘幹線が南北に走り、住宅が一丁目から七丁目まで整然と並んでいます。この真美ヶ丘のニュータウンが計画され工事が始まったのが一九七四年、そして完成して入居が開始されたのが、一九八三年で、同時に真美ヶ丘東小学校も開校されています。

真美ヶ丘の地名の由来は古く、幾つも説があります。一つには聖徳太子が馬上から国見をされたことから「馬見（ウマミ）」と呼ばれたこと。馬見丘陵が草原で牧場があったことから馬見、また桜の名所として「真美」ヶ丘であったとも。さらには丘陵に散在した古墳の形状から「マメヤマ（豆山）」とも呼ばれていたとか。ともかく馬見丘陵からウマミをマミとして「真美ヶ丘」とされたといいます。

それはともかく、真美ヶ丘ニュータウンは、馬見丘陵の一角、香芝市から広陵町にかけての古墳やため池が多く残る歴史的な地域に広がっています。したがって新しい街並みの中に、美しく整備された公園は、こうした歴史遺産である古墳を保存しながら造られています。観正山近隣公園、城山児童公園、勘平山児童公園、そして高塚地区公園などがあり、緑と文化財の調和した景観を保っています。

◆かつらぎの道を歩いてみよう

近鉄五位堂駅前からレンガの歩道が北に向かっています。道の中央にはヤマブキ、スミレ、モクレンなど一〇種ほどの花の絵柄を描いたタイルがはめ込まれています。

「かつらぎの道」は、ニュータウンが造られたときに、歩行者の安全を図りながら、また憩いの場としても活用することができて、ショッピングセンターやスポーツ施設という生活空間を結ぶネットワークにもなる道として造られました。したがって単なる通路ではなく、憩いや語らいの場ともなるような古代人の心に帰って、「みち」本来の姿を目指して造られたというわけです。緑や花、石を配置してうるおいのある風景を造り、電柱をなくした景観づくりが画期的です。

東中学校を左に見て道路を渡り、東小学校が右にあります。石畳の道とアスファルトの道とに中央の樹木に分けられていますから、散歩する人と自転車がスムーズに行き交うことができます。また、中和幹線などの自動車道は陸橋となって横断しています。この橋上からの眺めが良く、かつての馬に代わり、現代の馬ともいうべき自動車を眺めるのも良いですね。

レンギョウやツバキが咲いて、ケヤキやクスなどの樹木が木陰を作っています。春の陽射しを浴びながら、子供連れの母親たちがおしゃべりをしながらのんびりと歩いています。「旧大字疋相」と刻んだ石碑が道の中程にあり、ここからはショッピングセンターやスポーツ施設、高塚地区公園は近い所にあります。